

Title	杉山伸也著 明治維新とイギリス商人：トマス・グラバーの生涯
Sub Title	
Author	山本, 有造
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1995
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.87, No.4 (1995. 1) ,p.629(121)- 631(123)
JaLC DOI	10.14991/001.19950101-0121
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19950101-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

杉山伸也 著

『明治維新とイギリス商人
—トマス・グラバーの生涯—』

岩波書店，1993年7月，iv+221頁

I

いまから10年以上まえ、本書の原型となった杉山伸也氏の論文「グラバー商会」（1）（2）の前半がでた時に、評者はその掲載誌（近代日本研究会編『幕末・維新の日本』山川出版社，1981年11月）の書評（『社会経済史学』48-3，1982年8月）においてこれを取り上げ、大約つぎのように述べた。

杉山論文を読む者は、石井孝、山口和雄に代表される幕末貿易史・対外交渉史の担い手が新しい世代に取って代わられつつあることを実感しよう。ここでの第1次資料であるジャーディン・マセソン商会文書についてはすでにいくつかの紹介があって、その概観は一応知られている。したがってこれに関心をもってケンブリッジ大学図書館アーカイヴを訪れる日本人研究者もふえてきているが、その現物のもつ圧倒的質量は「一見の客」をよせつけないのである。杉山論文は、日本人研究者がこの無尽蔵の鉱脈に正面から挑んだ最初の成果とあってよいであろう。氏の仕事は、一方で外国の生の資料を使いこなし、他方で邦文資料を自由に駆使したものとして、内外双方の学界に対して比較優位になつ業績の一例を示したものとえよう。

その後、この流れが大流となって、石井寛治『近代日本とイギリス資本—ジャーディン・マセソン商会を中心に—』（東京大学出版会，1984年）、そしてまた杉山氏自身による、Shinya Sugi-

yama, *Japan's Industrialization in the World Economy 1859-99: Export trade and overseas competition*, London, Athlone Press, 1988, という2大著作に結実したことはよく知られている。

今回とりあげる杉山氏の新著は、学術論文として早くに完成していた上記の労作「グラバー商会」（1）（2）、および関連論文、S. Sugiyama, “Thomas B. Glover: A British Merchant in Japan, 1861-70,” *Business History*, Vol.26, No.2, July 1984, をもとに、その後の内外現地調査の成果を加えて、一般読者を対象として新書の形で書き下ろされた、人物史、企業史、そして維新史である。

II

明治維新时期における薩長の黒幕、死の商人という「神話」に覆われた、そして今日の長崎名所「グラバー邸」に名前を残すトマス・グラバー Thomas Blake Glover (1838-1911) とはどのような人物であったか。これまでに知られてきたその履歴のエッセンスは次のようなものであった。（武内博編著『来日西洋人名事典』日外アソシエーツ，1983年，110頁。—ただし〔 〕内は山本。）

1838年6月6日スコットランドのアバディー〔シ〕市郊外に生まれた。家業は代々造船業を営んでいたと伝えられる。20歳の頃上海に渡来し商業に従事したが、1859年に来日し長崎にグラバー商会を設立した。当時わが国における武器の購入は長崎で行なわれ、彼は各藩の要求に応え、鉄砲、火薬、艦船類の輸入に当たった。このため巨利を博しグラバー商会は大いに発展した。1865年には上海から蒸気機関車一台を輸入し、長崎の大浦海岸にわが国最初の鉄道を布設し石炭の運搬をおこなった。この鉄道はのちに大阪に移された。彼はまた長州藩士の伊藤俊助〔輔〕（伊藤博文）、志道聞多（井上馨）、野村弥吉（井上勝）、遠藤謹助および山尾庸三の

5名をイギリスに留学させる手助けをした。さらに1865年には薩摩藩出身でのちの五代友厚、寺島宗則、島山義成、鮫島尚信、森有礼等の一行のヨーロッパ渡航も援助した。結局こうした留学のための費用がかさみ回収不能となり、⁽⁷⁾1871年には長崎のグラバー商会は閉鎖され、⁽⁸⁾彼は神戸に転じた。⁽⁹⁾1908年7月維新における彼の功績に対し日本政府より勲二等旭日重光章が贈られた。1911年12月16日東京麻布富士見町の自宅で倒れ死去した、行年73歳。(以下省略。)

第1次資料によってグラバーの誕生から死去までを(さらにいえば家系から子孫までも)追跡した杉山氏の丹念な調査の結果に従えば、上記引用のうちだけで下線の部分がかなり小なり誤りであることになる。(ここでは武内氏の業績をあげつらう意図は全くない。歴史上の人物の履歴がいかにも不安定であるか、その事例を示すためであることを念のために付け加える。)

- (1) トマス・グラバーの生地は、アバディーン市の北67キロ、バンフ州フレイザーバラという港町である。
- (2) トマスの父、トマス・ベリー・グラバーは沿岸警備隊のオフィサーであり、母方の祖父も船乗りであった。家業を造船業と誤伝した原因は、トマスの長兄チャールスがアバディーンで船舶保険業グラバー・ブラザース社を営み、トマスが各藩の依頼で発注した艦船の建造を仲介した事実にもとづくのかもしれない。
- (3) 上海に渡来したのは18、9歳のころ、長崎到着は1859年9月19歳、時にトマス21歳。
- (4) 長崎における最初の身分はスコットランド人貿易商ケネス・マッケンジーのクラーク、1861年5月にコミッション・エイジェントとして独立した。ただし、フランシス・グルームとのパートナーシップによる「グラバー商会」の設立は1862年2月。グラバー商会は自己資金で取り引きする独立商人であるとも

に、ジャーディン・マセソン商会に代表される大商社の長崎代理店を勤めることで大をなした。

- (5) この鉄道の件はなお不明な点が多い。
- (6) この長州藩士密航を斡旋した件は有名であるが、根拠はきわめて薄弱である。この時5人の長州藩士の留学を斡旋したのは、ジャーディン横浜支店の支配人サムエル・ガワーであった。
- (7) この文章のままでは、薩長雄藩の債務踏み倒しによってグラバー商会が倒産したかのごとくであるが、事情はそれほど簡単ではない。幕末期における投機的貿易商から新しい国家建設を支える鉱工業企業家への転身を図る過程で、資金的に背伸びをしすぎた結果の失速と見なすのがよい。
- (8) グラバー商会の倒産は1870年8月である。破産整理は、ジャーディンが手を引いたあとを埋めるかたちで資金提供をしたオランダ貿易会社(オランダ東インド会社の後身)の手で行われた。
- (9) 商会倒産後もなおかなりの期間、グラバーは長崎にあって自らが開発に係わった高島炭鉱の操業に参与した。

杉山氏の丹念な調査の結果、「ヴィクトリア中期における中産階級の典型的な教育を受けた」若きトマスが上海に現れるまでの経緯など、いくつかの主要な問題を残しながらも、維新神話中の人物トマス・グラバーの実像がほぼ明らかになったことを、維新史に興味を持つもの一人として喜ぶたい。しかし本書における杉山氏の真の意図は、トマス・グラバーという一人物の生涯をととして、明治維新期のイギリス商人、イギリス資本のあるタイプの盛衰を描こうとしたことにある。

III

「お雇い」を中心として、維新期の日本近代化に尽くした来日外国人の研究はすでに厚い先行業

績を持っている。かつまた最近における海外交流の活発化を反映して、教育史、技術史、さらに外交史、宗教史などの分野で、内外の第1次資料を駆使した新しい成果も少なくない。管見のかぎりでも、三好信浩『ダイアーの日本』（福村出版、1989年）などはその好例といえよう。こうしたなかにあつて、「開港」をまさに現場で担った商人たちの事績、これにかかわる経営史・経済史の分野の研究は大いに遅れをとっているといわねばならない。

商人を核とする経済人物史研究の困難はどこにあるか。基礎資料が少なすぎることと多すぎることとの、矛盾する二重の困難に阻まれているといえよう。初代駐日英国公使ラザフォード・オールコックに「無法で身もちの悪い連中」と酷評された商人層のほとんどは、その伝記資料を残す気持ちも手だても持ち合わせていなかった。そして彼らの活動記録の本体をなす経営帳簿のほとんどは、活動の停止とともに雲散霧消する運命にあつた。そして万一の僥倖によりそうした経営資料が残された場合、今度はその膨大な生資料を読みとき、分類し、解析するという気の遠くなるような作業を必要とする。

杉山氏のグラバー伝は、一方においてイギリスに長い伝統をもつ系図学的調査 genealogy の正統を踏み、他方に、ケンブリッジのジャーディン・マセソン商会文書およびハーグのオランダ貿易会社文書を掘り起こし、それに経営史的分析を加えることで成し遂げられた。

1861年5月の商会設立から1870年8月の商会倒産にいたる約10年に集約されるグラバーとグラバー商会の経済的生涯は、この期の極東における「冒険商人」=中小規模外国商会の進退をしめすある種「典型的な縮図」であつたといふことができる。こうした中小外商の活動は、資金面および取引関係からみるかぎり、すでに一定程度の地位を

確立していた（ジャーディン、デントに代表される）大規模外国商会による極東貿易網の枠組みから自由でありえなかつた。トマス・グラバーという個性、その「政治好き」が他の外国人商人から彼をひときわ目立たせたとしても。そして、冒険商人から企業家への転身をめざした彼の「正しい」選択とその挫折を含めて。

IV

ここから先は、杉山氏の新著の範囲を越える。

幕末・維新时期をいろどつた外国人商人、企業家たちはどのような人物であつたのだろうか。彼らはどのようなパーソナル・ヒストリーを背景にもち、なにを思って極東を目指したのであろうか。彼らはどのような利害を代表し、それを如何に実現したのであろうか。彼ら是有形無形どのような遺産を日本に残したのであろうか。

政治史、外交史、技術史、教育史、宗教史の分野とはやや違って、経済・経営史における人物史研究の難しさは、ある「典型」「代表」事例の物語る範囲がきわめて限られていることにある。経済人の活動の特性は、彼らが無名匿名のマスとして行動し、その結果が例えば経済統計の変化に現れるところにある。経済人物史研究は、個人解剖と同時に群像処理の技法を開発しなければならないであろう。

杉山氏の仕事は、おくれた経済史のこの分野で、ある「典型」を示すことに成功した。幕末・維新时期の外国人商人群像を類型化し、トマス・グラバーをそのいくつかの層のなかに正しく位置づけること、このさらに新しい仕事が、杉山氏をそしてわれわれを待っている。

山本有造

（京都大学人文科学研究所教授）